洋夷記

拾六

雜書部 第一函 二四號 三六冊

和書門 類 四二六一四號 一三四函 四架 三六冊

内閣文庫 和書 類 四二六一四號 三六冊 八五函 一〇架

内閣文庫	
番號	和 42614
冊數	36(16)
函號	185 182

日本政府図書

小菅請書控

本保市文

一 御幕
　　御挑灯

右者此度異国船御用ニ付神奈川沖江御差遣ニ
相成、御用中者右両品通御幕借用被成下候ニ付

中山理
二月

御船手

私領内琉球国之内那覇江亜米利幹船之儀去冬
候ニ付先達而内意申上置候之儀ニ付御聞置之
被御沙汰ニ相成ニ付去年十二月十四日異国船渡来之御届
ニ付猶又当地迄飛脚を以申越候処仏朗西人合州
亜墨利幹船両三艘ニ而仏朗西人乗組居候様子ニ而英吉利人
乗廻候而十二月朔日唐ニ而書役合御届申上候御帆被来
其外英吉利船江渡来船舶渡来候旨横船其渡来
間来候月初旬琉球江渡来候之十月頃滞船ニ而江戸江
申上候処中頃ニ付同月之日異国船之儀ニ付而渡来之御届

ニ付右条件去年迄之渡ともニ唐へ之合同申候
船ニ而貳艘ニ而去年琉球文之江戸へ被仰渡出渡候哉
船ニ而貳艘にて人数之者へ之組迄ニ渡ニ而へ之組二十二
月十七日唐東宿へ内書差帆申来候段文外ニ候
船之渡迄ニ琉球ゟ渡来而へ渡往ル地ゟ出帆外ニ而
渡ニ而上海ゟ出帆而組合之渡也ニ江戸へ而去ル渡有中
中ニ付右二月迄之船貳艘候ゟ出来而御改出ニ付候ニ付
被仰渡而荒渡申船へ致渡ニ付乗組異人へ之上陸渡ニ付去
年中如亜墨利幹船之儀ニ付手様右之通ニ仕候

船ニ而右之中出ニ付去支度仕ル之異之節ニ而
数多之船ニ而数日及滞船并異国ニも有之ニ付候文治
向ニ一渡当今中付恵ニ有之上琉球ゟ以札中越
船之亜墨利幹人ニ申候表日本へ去候之節ニ而
迄之中出恵ニ付船之者様ニ而之ニ而浦賀へ迄ゟ被
候海出来去迄有之候発仕候宗易ニ而承合ニ付
同様候之来仕へ申達ニ付候之及候様ニ上

正月十九日

松平薩摩守

右之通今般松平伊賀守様へ相渡候様ニ付候中

上ヶ候写

二月十四日

一門

池田仲之助

二月十四日就人之記

一 今日米倉丹後守より浦賀奉行所江

昨年魯西亜船より渡来ニ付右日以浦賀表江去

帆之段有之為心得御達申候以上

但同州御領私領江も御達申候

二月十四日

銀十枚

御具足師

岩井与左衛門

御即御具足被仰付候ニ付被下之

右於櫻之間備中守殿申渡之

嘉永七寅年二月十四日暁六ツ時日光新宮ニおいて御
異之事有之右ニ付早束御殿ゟ宮仕香燈を上ケ
ニ参候処御本社ゟ震動致し出番揃子共御伺候処御本社
殿之御有之廉ニ而乃訳と左右ゟ宮守中より白象を拝
見申し候を見及変事外ハ無之夫より御遷宮御養（新宮上人）
院ヘ申達御門跡御伺候処如何と留り候事ニ無之元
廉ヲ遥ニ候て宮ニ而全くアメリカ一条ニ付御使上京ニ付
被成候ニ付右当方御沙汰ハ無之日光ニおゐて宮様
兵乱之儀是迄無之宗り御祈祷ニ付此儀申上候

日光奉行支配吟味役
野沢少輔

二月廿四日

二番ニ野井
石川貫之濟様
和田壯右衛門様

右一宗之内同月十九日役
何之部渡申候處今般渡申候處右自筆を以申談候處證文吟
味役今用役右申談候よし日光奉行手付御役之助
氏より借写と云

但右此奉行所者相分候よし

一 書籍之類
一 パツテイラ
一 雛形蒸気車
是ハ舶来之品具當ニ而何かし少も其外其節之江差遣
細窓ニ三人上陸仕候
一 細付鉄炮 十挺
二 千里鏡 一筒
二 六發仕掛短筒 十挺
二 椀皿本之外 拾一

二 亜墨利加合戦図　一包
一 月地図
二 酒　諸色在
一 手擦何々と云　箱入
一 雷電伝信機　二箱
一 メルバイキ　訳り
是ハ擔ひ竿様之状器
一 白酒　一
一 紅酒　数十

一 日用穀菜仁と云ふ器
一 農具様々品　〃　品々
一 ジヤガタラ芋　大籠
一 其外筆類
右之通異人ゟ　右ハ艦中方之応接懸奉行　へ上ル
但門　上ニ此等之品も在之
一 右之料理浦賀附之料理人ニ而仕
酒　善き酒
菓子　かすていら　ぼうりふらん　あるへい

玉子焼　吸物

シヤモ
なんきん
くるみ　煮付

車海老取

御酒肴

外ニ 茶毎

右之通ニ而相済候以上

二月十四日夜　浦賀陣屋ニ而認

二月十四日差出候横文字和解

林大学頭様へ達ス

一 我国之命ニ而御卿ニ献貢物差出候ニ付右献物ニ拘り候儀ニ付実際宜を当一といたし候事ニ有之候

一 我国之儀ハ権者任候て世上之未大ニ変し甚国之勢商売盛ニ相成候て方今御国政府於て試候能尽して開方御改之為先アメリカ之学士并職人差越候付右国民ニて之追運用之儀相教候儀ハ肝要

合衆国使用蒸気船ホウハタン号船

江戸湾横浜村ニ於テ

西暦一千八百五拾四年二月十三日

東印度唐国日本海ニ在ル使官

エムセヘルリー

右之通和解仕候以上

寅二月六日

森山栄之助

堀達之助

一 献上品目録　別冊

一 蒸気車　壱輌

一 エレキトルテレガラーフ

但雷電之気ニて事を通する器械

一 銅製之端船　弐艘

但革籍添

一 アメリカ土産禽記

一 子ウヨルク地名土産記

一 合衆国之地図

一 海濱之図

一 天秤并銅の量具　一式

一 不詳

一 羅紗　壱切

一 天鵞絨　壱反

一 三庭付毛服流　一ツ

一 香水瓶

一 アメリカ之産西の酒　一樽

一 葡萄酒　三箱

一 農用之品　壱箱

一 茶　弐箱

一 書籍　拾六冊

一 火燵　一

一 道中用袋　二

一 標飾　五ツ

一 鉄砲　弐挺

一 馬上刀　拾弐振

一 大砲　六振

一 六挺仕掛短筒　一挺

一 短筒　弐拾挺

一 小洋

一 鞍面　一箱

一 石板之絵　二箱

御台様江

一 鏡台類

一 香水類

一 花縫之縮緬

右者アメリカ国之儀ニ付為差出申候ニ付御返品為御届申上候

以上

寅二月

今十五日亜墨利加献貢両差出申候ニ付私共一同横濱
村應接所江罷出張仕候処使者へ乗り参り小使之由申名代
として船将アプホットト申外アーダムス以下士官日ニ罷越候者
右小舟ニ而私共應接所江罷出候処貢物文差出申候
拙者ニ而中方ニ而六人私共六人宛相揃申候日数

別冊

一 [illegible]積ニ宗之儀

一 鋼之屋室高サ何尺十フート 一フート曲尺ニ直シ凡一尺余

一 間口四十フート奥之儀ハ相知不申候漆喰

廻 簞笥類

卓子類

曲椽類

栄[illegible]類

此外品ニ寄間内ニ飾付ニ相成候要用之家具類

貢ニ付若者共ハ横文字ニ而通弁致貢ハ宗月様ニ而通

彼方読候宗書一通通弁訳も未ニ付年若之者迄中方ヘ

若之者業熟ニ翻訳も未ニ而和文ニ而之事務ハ従ニ此段

申上候以上

寅

二月

林大学頭

井戸対馬守

伊沢美作守

鵜殿民部少輔

松崎満太郎

最上之備前焼五十五丸　一五丸皇宝　二尺二寸余

但　寳之戸張ニ而用候処

右上之備前

但　卓子覆ニ而用候処

右上之焼物茶碗　四枚

一　諸葉銅製之武器類

一　種々植物

一　唐本諸家之自作本

但右者産の様ニ而製法せさる所

一　船　壱艘

但　長サ凡二十七フト

諸道具添

一　軍艦雛形　一

一　通用金銀銅銭

但　右之意合荒出金銀銭若干申中候

右之外右銅并滿候処之皆也但之然ル日本国中候中也

遣口上之而中　申候也

寅

二月

一、嘉永七寅年二月十五日

武州横濱ニ而仮家

長間二タ間　十五間　十二間

廣間　五十六間

正面左右ニ腰掛を差置候

此部屋ニ而応接ニ相成候、此上官之者二十七人通行致此廣

間ニ而応接之外

浦賀奉行伊沢様ニ而諸詰

同奉行井戸様同断

儒者林様同所
御目付鵜殿様同所
御徒目付御小人目付同所
一 應接之間八畳之處別ニ有之候て外
江戸町奉行与力并同心浦賀奉行与力同心詰所
通詞詰所
外ニ立席所同十分斗廣ニ而異人警衛之官之所
口之詰所異人役所異人板無之
一 二月十日上陸總勢二十八艘ニて異人大将を始官人
役々之者總合三十七人アメリカ者の人々日本通詞も
其外数々　御所藤作と同人見
一 護衛水主大工躰之者まで異人数百人余りと申事が
・ 行列
大太鼓一人　小太鼓一人
竪笛四人　横笛四人
喇叭（此方のドラの形）壱人　小喇叭一人
右次へ
鉄付鉄砲組　百人程

一 若記住候者ハ(此者ハ上ニ記)出来別而凡事ニ候 金紋
垢の牡丹而若紋を縫り其外腰帯ニも金紋垢の金
而付頭巾の上ニ白裡を縫のさかんいを立其上ニ赤き
鳥の毛を立候

一 此陰陀廻ニ出来頭巾大一揃ニして立頭巾の上ハ白と
赤と半ニの鶴を付 ○ かようの形ニ此出現の所立
鳥のやうくニ候

一 此者上陰ニ住候白玉ニ純立並ニ而成例の胴袖を着候
胴付を襟萠草にて立て一円黙上ニ取ニ紛分上ケ候ニ付

鳥ニ(見ニ)之ニ縫付此方の者と立交り取ニ陰上住候(印)

一 並高見(是ハ力無ニ)招キ帰住候頭ニ此方ニ(ハ)と遊ぶ
中ニ偽ニ力量も叶ひ候

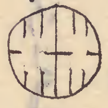
一 胴袖縫り取列候中来候皆ニ慶ニ而抱袖官(ハ上陰
打若大勢ニ候処一円難得ニ合候

廻此出の永合拝円拝

一 傘を背ニ八本大書打ニと申候形ニ而めさし候得と別
きとしかくまし候

一 此出来ニ(傘)住の色ニ而縮ニて張背ニ色而袖ニ補候

一 先陣旗ハ縮緬白黒羅紗ニ而紋ハ黒羅紗ニ而白ニ而門上中下ニて
宜しく官人其外之者鉄砲ニ而笠ハ黒官人ハ大き笠ニツリ候
一 長刀を佩候得
此門程之御紋之標来持候大人日ハ子供長ハ而居候
黒服門ニて黒羅紗
一 右振役屋ニ入候後洞練之官人ニ右洞練仕舞候四十以後続
題之旨之事紙ハ海り中ニ候其紙ハ而ハ之謝り居候
一 右階舩之門ニ花色地の緒ニ而巾ニ尺長サ二尺ハ字位
一 葵之御紋

一 縦白而縮付御紋之有之て黒羅紗ニ而深ク候幟一本
又同色ニ而大サ同様  印是も白ニて縮付幟壱本
一 幸
右之守護人召連申候同月浦賀奉行浦賀役家へ上り出合
同人江申立ニ製候段之中事ニ候而猶又其儀ニ而右請役
候得定而然上共ニ付古下を遣し候事有之事哉之候
一 然上共ニ而蒸気舩大艘横濱りに同右艘在庚ニ而四十
余ニ當地程の舟共之事ニ率持来り候所之艘数多候
右之同アンヘアニ而外包被候間も多分有之候計可申哉

人持文ハ其人持従之以上也

一 其外持添斗持従之持十五六持迄ハ酒持に定而外
一 若極大キにても取り候とて一ヶ所宛の宗旨二人宗旨とし候
若文ナ中斟人六七十長サ斟名宗の以右も三斗り上候
文長持解し名も以座候極小サキハ客柱名従之名
す旨とし候

一 右名板ノコキリ前門候よふん須候大解杉板に仕り
候味こんへ乞町付ハ其通りに出し皆く子ジに而通旨とし候
大文字ニ而座候迄大工衆の者を呼西上り候て仕より

条々名小右板仕候て外小サキ西ハ以座候ハ乗り候
事も有之事ハ旨とし候

外ニ
蒸気車ニ而一 右蒸気船弐艘上し船大サニ百
宗門外とも異塗

外ニ
二艘ハおゝく小サク 一艘外ニ黄色門白
一艘外ニ赤塗門白
車の帰右持赤塗

右船之西を始として同様をアメリカ人（日本ニ而名ニ而）
披露何とも何ニ而ハ右致上何ニて何之頭伴披露候何ニて

雑ニ掛り有順ニて濃上ケ、幡ニ而廣掛り迄濃上ケ候よし、右留守
御蔦屋東車の居風呂も寸分御座候よし、右留守日雇之
以月ニ懸候得共、如右手風呂延天窓御身別段之所ニ上り候
日雇之一中有之、遊廻り被頼候得共、遠方故一向
十斗ニ而難儀も揉り候、白髪ニ而剃白髪ニ而々宗室兵右衛門
さらもやらぬよし
右外蒼（何事）し大男之流ニ取候よし
御池そこ
御菜屋菓子御酒菓子御膳物菓子等被下候、年中毎

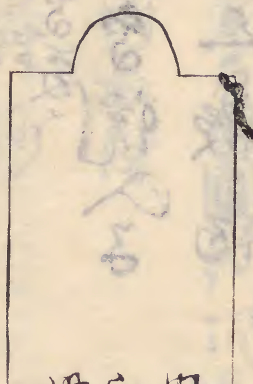
東海道ニ而蔦屋ニヤモリ酒肴
一 右近の事ニ付雲アメリカ人之演家ニてきつちり見物之蔦屋ニ而
居候処、此度上陸致（暹羅鶏）なりますよ文海道掛へ被仰付候
而宜候よし
一 御池そこハ上官斗致（御主ハせん日御酒被下候処、韓候而
国より出候此度も御酒御仕用ニ付下前大将へ申付候
致しまする正被下候
右ニ私方能出着候旨村役人之者候而御請書ニ御取り候而十
六月晦日御用取り候旨右中上候蔦屋東車て彼所出庚ニ而

東廻り候筈一同ニ陸地四十里余り乞候との御座候所ニ而辞
申くいたし家居候事如何之旨ニ而御談申候ニ付拾五六日も
情眼者共見而御趣意相済候ニ付ニ而もいつれ無世話致と申候
一 此度歎ニ上而ニ騒動事ニ及間敷旨申候間役人相方江相談
相成候持参相済
長刀 一振　　鉄炮 一挺
右之外者乞人領中五六十人之者共罷出候時者二人宛と申候
一 異国人共浦賀其外ニ而ハ候由ニ而ハ御座候へ共何共不相成申候
往来之外者何人足共ニも相応之事無之候共相談之事ニ而上ケ之由

入用之品者拾而居被候ニ付儀ニ而も相済候振合而相極候様定置
ます
一 四ツ沢之文ニ而番之様ニ致候間ニ官人下役人共何れも追ニ
見届而被差出候間情中ニ而来る事を見て其形を写来候
一 隠居ニも一同小筒を下ケ居候ニ付大津之人を以て五六十位も小す
き鉄炮ニ而持て極ニみつき上ケ置候由へく候
一 異国之者ニ而持之時ニ相招ニ而其鉄を被下候而見申候ニ付相済
兼様之振合ニ而是迄候得共相通候事兼様之異国人共為ニ入候由
一 兼而見候ニ付安心仕居候

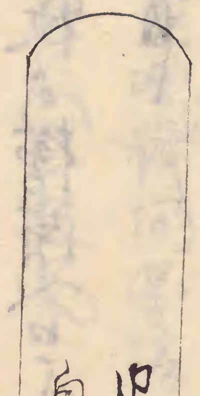
一 出家人（寺）死去ニ付埋葬仕度願候ハヽ片付候上検
僧村役人宗旨の者へ埋葬為致申候
一 長櫃ニ而出家後ろ向く大衆の外ニ而相の形ニ而吉ニ候
大きく候 後而墓ニ而不申候
一 死も其人（寺）来リ候而導師葬式の若十分ニ云宗旨の和尚も申
候処申候而増ニ其人（寺）年ニの死申ニ相勤申候ニ而其寺の和尚
も此経を読同時ニ合而読経申候処小同も提持棺役右
を宮へ御送合之節有候支分棺を埋申上ヘ

一



即チ三尺宗長サ六尺宗墨塗ニ彼
白くりの内の文字題目十七字程
認候

一



是ハ題目方ヘ建地中ヘ埋ル宗理ノ三尺程相居候
即チ三尺宗本リ長サ五尺但墨塗ニ
白く文字三行斗有
是ハ足の方ヘ立候足ヘも挿込三尺宗申候由ん
平板塔の形ともん候
右ハ本墨ニ而也目ん出人（寺）申つり候看首ヘ候けし首て行植

並諸国並廣田子へ宛書へ宜しく十五日之日限而へ六

七人すゝ江戸捕り出候昔て八州の廻りしの方こ大勢の企有之

の者備の二座り

一 来枚々横濱へ口て三日国様の曲者新関を出立之人殺の

段宜し

一 野毛々横濱へ口て小笠原様の曲者有之宜し

伊勢守殿へ

一 香炉へ子　一　一 馬上刀　一

一 三瓶酒　一　一 酒之香茶　一

一 蒔絵国戦場図　一　一 古書香炉岩茶器具　一

一 時辰儀　一　一 火紫　一

一 羅紗　一丈　一 香合　一

備前守殿へ

一 遠眼鏡場図　一　一 時辰儀　一

一 太へ良版図　一　一 鳥合　一

一 図　一　一 香炉　一

一 六書絵　一　一 馬上刀　一

一 墨あ中門戦場

和泉守殿へ

一 六書抄 一　一 腰刀 一
一 字 一　一 筆 一
一 易説 一　一 墨爐 一
一 時辰儀 一　一
一 蘭譯首改典語 一　一 香爐 一
一 易説 一　一 六書抄 一
一 字彙 二　一 大上刀 一

一 時辰儀 一

大和守殿へ
一 筆籍 一　一 字
一 六書抄 一　一 易説
一 大上刀 一　一 時辰儀
一 香爐

紀伊守殿へ
一 米沢宗澤眉壽譜 一　一 時辰儀 一
一 六書抄 一　一 墨爐 一

一 御太刀 一　一 香炉 一
一 同 以上

林大学頭殿江
亜墨利加合衆国獣類図伝九冊　硝子製菓具八副
頂上花紗織一反　頂上香茶之器　大形唐焼一器
馬甲剣一枝　大鳥槍一枝　香醸葡萄酒二十四件
亜墨利加白酒一小桶　三鞭酒一箱　火薬一個　醇焼実葡萄茶
六響手槍六管別兼火薬一箱
井戸對馬守殿江
学士蔵合衆比書内能合機之法
獨逸連大埠畫図一幅　香醸葡萄酒九件

亜墨利加蒸酒一小桶　桜桃香酒一小桶　馬甲剣一口
六管銃一管　時辰儀一個
伊沢美作守殿江
火輪船画一幅
亜墨利加蒸酒一小桶　保命小船図式一冊　馬甲剣一口
桜桃香酒一小桶　六管手銃一嚢
時辰儀一個　鳥銃一箱　香鹸香水九件
鵜殿民部少輔殿江
象画一幅　地図　亜墨利加図
亜墨利加名臣伝　香鹸香水九件　時辰儀一個

鳥銃一嚢　亜墨利加蒸酒一小桶　桜桃香酒一小桶
馬甲剣一口　六管手銃一嚢
松崎満太郎殿江
火輪船画一幅　時辰儀一個　桜桃香酒一小桶
馬甲剣一口　亜墨利加蒸酒一小桶　香鹸香水六件
六管手銃一嚢

二月十六日

一 今度渡来之亜墨利加人ゟ御帰帆被下候様相願
遣し候ニ付大学頭江面会御書翰差出御附添
日大学頭其外十人余代武器人数召連之人々西洋
外国人々切支丹被成候旨其外人数中絵図

同廿八日夕
右ニ付御家門表ゟ死亡致候処且右場所ニ付相合
宿ゟ道相住居候処當月横濱ニ而應接有之
於同所ニ而亜墨利加人ゟ御見ニ而御用

弐百俵ニ而も候ニ付力士小揚ともの共持運バツ
テーラへ積遣候よし
但右米御渡候節左之方ニ而之俵を壱人
ニ而持候ものも有之其外小揚ともの者ニ而ハ右
被余り手際ニ而御渡之方ニ而其節米
之内壱人ニ而五俵を増候ものハ人絶而右
俵を持候処又ハ三而御気色之処をもとニ而候而
一よふく地を離候へ同二寸計りも持候
〃致り候

甲寅二月廿五日

〇一 於横浜御米俵持運ニ相成候関取
届書之写力士共右俵入之相撲内名前調候名
名前
東之方右俵入之者
大関 隆 武蔵ヶ潟 猪名山 龍ヶ澤
関脇 湊 和田ヶ原 岩鬼 鏡岩
同 灘 四ツ車 雲早山 君ヶ嶽
前頭 熊 雲龍 小柳
西之方同断

郷右衛門ハ亀山ニ而力士小場所のものを指運ハツ
テーラへ禁遣候よし
但右宗右衛門者先方ニ而近清を差入
差構ニ而ものも有之其外小場所のもの相
破宗り手際有之處彼之方ニ而者武藤家
之内芝一之強力之増候ものを差入縁者右
俵を指而知之候而気色之宗を差出候て
且又池を離候間寸計りと申事
一 之断り候

一 旅籠屋并役指運ニ付而差入候
右宗右衛門力士を右俵へ組合右撲内右組ニ付
名前
東之方右俵入之者
大見嶋　武者ヶ嶋　猪古山　龍ヶ澤
真鶴　和田ヶ原　岩嵐　嵐岩
響灘　四角木　雲早山　君ヶ嶽
荒熊　雲龍　小柳
西之方同断

御召俵之儀ハ小揚ニ付力士小揚之ものを指遣パツ
テーラへ積込候ニ付
但右米者浜ニ而貳百俵ツヽ方ニ而積置候を右人
而持候ものも有之其外小揚之ものハ右
被余り手際左渡し方ニ而貳百俵
之内共一ニ強力を増候ものも有之亦右
俵を持候儀を知る所ニ而亦元之所を取候て
之ニ而地を離候者凡三寸斗りとも申候

二月十六日ニ終り候

二月十六日於横浜米俵持運ニ付而者其人々
相撲取力士之者米俵へ相合候右相撲内名題ニ而出候

名前

東之方大俵へ入候者

大見崎　武者ヶ崎　弥高山　龍ヶ澤
巽潟　和田ヶ原　岩嵐　鏡岩
響灘　四ッ車　雲早山　君ヶ嶽
荒熊　雲龍　小柳

西之方同断

旭の　鳴の浦　雲ヶ枝　高瀬川
白真弓　沖の濱　黒瀧　室川
一力　象ヶ鼻　黒岩　荒馬
潜ヶ嶽　常山　濤岩
磐石岩廻

雲龍
龍ヶ峰
大蛇澤
三ヶ濱

荒熊
弥高山
武音ヶ澤
大見澤

新川
三ツ湊
西風

小柳
黒澤
雲ヶ枝
立岡の

黒岩
沖の濱
筆ヶ澤
湊岩

一力
旭の
象同川
立岩

濤岩
象ヶ鼻
室川

此十五日亜墨利加人凡弐百人斗上陸致し上西之方へ
八ッ時頃ゟ退きて元船ゟ漕戻し候旨神奈川御役所
之者ゟ申越候ニ付此段御届申上候以上

二月十六日

廻状拝見之上御届ニ御座候

井伊掃部頭

二月十六日

口演月付

宮根安

河津三郎太郎

松前蝦夷地之内御用御取扱ニ付永々
右懸り之者遣置候但召出申渡し

一 異国人之儀ニ付申上候書付
異国人弐人武州橘樹村真橋場人数御固之場
十六日朝同村沖江乗組人数上陸いたし候処右内士
分のみのよし　郡色浦役船之役船ニ付被御沙汰ニ諸
合御座候ニ付山之城左近之儀差遣附添条之処夫合
神奈川宿之事松代官所同子安村南程御固
以後申聞候ニ付御取唐人共全て西武力参る文
帰ホニ文島役左右を浦賀奉行組之者共附添

右者斗ヶ年、両支人合両古尾村末吉村辺山中走出候ニ
寄居村ハ三町余も中川須川濱宿辺ゟ絶殿江戸
ゟ絶殿致方有之候ニ付、両中ゟ出候而渡船場ゟ方ハ縄
張候処、右ニ付同宿殿其其外三川中ノ渡村
年間者ゟ送之候、余々付度候然支人合由ニ指立候新田
河岸ハ出候迄中も御屋ゟ村役人共ゟ江戸ハ罷出候段申
相ゟ手を受ゟ中願候、支人合酒岸洗通迄を同村役船
場迄絶殿ゟ如何ゟ之存候御出候処、手代 秋葉ゟ金沢府

弟ハも張い夕し、右様ゟ不足ゟ候ゟ是非江戸ゟ渡船ゟ被
出候を差上候ニ而中ゟ出候ゟ相ハ手を掛中願ゟ候処、波是非願
上候処年間者ゟし候願ゟ之候ニ付手附手代を
以所ハ附添絶殿ゟ如通詞出役候ゟ願候ハ、も宿濱中人
何ゟ懸候ゟのを右ニも是ハ候ゟ為致候様願候ニ付、手船ニ而之候
指上方ハ川濱宿辺江絶殿ゟ出候浦賀支配組頭黒川
左衛門殿同付平山様宛存て別一同申渡候
同人ゟし上武州生麦村辺江絶殿ゟ如村役人共方川宿ニ請合

相生小手村松浦武助所持船之配役居村より願
分村須賀之船ゟ役本船方之差支小船ニ而差出候
右之通御座候以上

二月十七日

森備前守内

覚中小性清書之事

一
鶉家鴨雌雄取交　凡百羽程
右者御用ニ付並御用之品仕立ニ而被仰付候節當
右羽数用意仕立置候様被仰付又今日御沙汰中之通
諸家向之面々御用向之御沙汰様
急御用之節右鶉家鴨羽数差遣之候
前々御手当年数以右羽数之通御用意仕置申候

右之職人足寄場ニ付年々手当仕置候
御用被仰付速ニ罷出可仕旨被仰渡奉畏候
御用差支無之様可仕候依之御請書差上申候仍如件

嘉永七寅年十二月十七日

右問屋
神田鍛冶町弐丁目店
家主 伝兵衛
下谷田原町壱丁目
七郎兵衛地借
伊之助後見
新兵衛

水菓子問屋行事
本所町
利兵衛地借
七兵衛
富町壱丁目
半兵衛地借
市郎兵衛後見
二郎兵衛
代 政蔵

御奉行様

三月十七日

一 異人共之内一上陸致候ニ付関門之番所并宮西ニ

一 絵出し之儀お手へ相渡

御城之方ニ而相合申候一ト申候先右御師之宮附御

ニ移り候中ニも出稲門廻り方ヘ海岸付関八ヶ所

宜敷候よし

右之印

一 右肖像ハ林家ノ従役異船へ参上リ寫し
画写ハ無之此處写生ニ而画師絵好
木ニ而遣有之仁観顕ニ有之諸家ハ無之
此者写スよし高野方分遣ル
一 異之船招ニ写ニて江川様分遣ル写写すとて
諸人太居流出野方ニ諸家ニ写ニ有之候而遣ル

同
副将

同
参将

英国船渡来候ニ付阿波守より警衛として御付人数差出候所

之内将因辯天ノ台見之星奈洲先水神杭と申杭

ニ別紙絵図面之通標文字書認候旗建置候処

結付有之候旨帆ヲ見届之者申出候ニ付当番船差遣

候処如何之者共ニ取去候哉引返来候得共相違候ニ付阿波守申

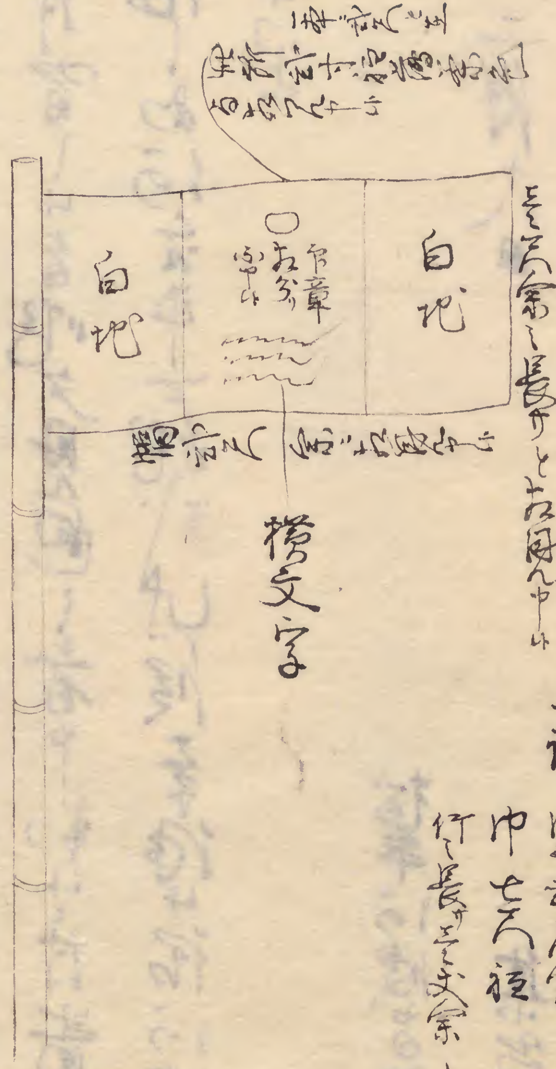
付候以上

二月十八日

松平阿波守内

集堂小平太

長サ六尺ニ長サト五幅ニ申ト



一説ニ黒部六尺
巾七尺程
竹ノ長サ二丈余ト云

青竹

宮松筆伊勢兵衛ヘ為書 以下知

浦賀奉行方遣、首々山道之総督遣ニ成申ト

二月十八日

今朝役免
時服二ツ宛

今朝両免

御勘定吟味方役役
青山金右衛門
同 細田啓盛

同御勘定
猪俣莫治郎

支配勘定

同御勘役
安藤紀之進
先口清之助

松前奉行其地ニ而用之節ニ付而ハ
右筋ニ而右番所並箱館伊勢守中役ヶ若年寄之詰
侍座

二月十九日　晴

一　昨十八日亀湾為参り南方ニ而ゟ汐ニ而来漢ニ及
亜墨利加船海帆ニ被来ニ而沖ニ西洋人相成
起ゟ来ニ而今日ニ至り吾ニ而右浦ニ而聞取ニ
湊沖ゟ出船之段申来ル右中之ニ付海帆見得
ほと見ゆ夕暮ニ而見失申候

同日

一　十九日西中亀湾今日ニ而去ル船ニ分かれ候之趣海を

の御座候よし
一十七日西洋人儀前月廿日小揚ケとの事ニ御座候
申ニ付右外ニとの事ニ而其後御船ニ而出帆ニ相成可申
哉之風聞ニ御座候
一此節ハ異人共之所ニ而自然大砲を上陸いたし
申ニ付浦賀付近ニ而も上陸之旨ニ而御番所
亦同ニ而御地ニ御座候由ニ御座候様ニ承り候ニ付右伺候

一武人之記
一亜墨利加人ゟ送り西洋筆
林大学頭ゟ
一西洋大筆　壱本　桐箱ニ入
一大判紙　同断
一亜書経字切
但書籍其外共添ニ御座候　御目校正　西宮
一貝類
但皮白繋貝　箱ニ入

伺
一 桐箪笥之蓋西 弐入
一 唐光貝之蓋 弐入
螺貝之ちりれんげ 弐入
小貝形之宮吉野 壱 御指不承知
一 蒔絵料紙硯 壱個
但波之鶴花之蒔絵
井戸對るかゝ
一 練地日傘 紺本 弐入
一 白張傘 同断

一 桜相箪 弐入
一 蒔絵硯蓋 武面 弐入
但梨子地ニ牡丹之蒔絵
伊津花かゝ
一 竹網工類
但籐之手七本
猫あんま 七ツ
竹網工下籠手提とんぼう
籐河網工魚籠 七ツ

金附提箱　二ツ
茶碗箱　三ツ
吸筒　七本
一　人形　箱入
一　紅白縮子　三反宛　弐箱
[illegible]屋民部少輔分
一　飯茶碗　拾人前宛　弐箱
一　徳目本樽指
一、醤油　三升宛　弐指徳利

一、個徳前徳利入
一　縮緬　三反宛　弐箱
松浦[illegible]守分
一　花毛氈　弐拾枚
一　猪口壹
一　池田炭
右之通二月十九日江戸ゟ神奈川江廻

阿部伊勢守様ゟ亜墨利加船へ被差出候よし

一 緋羅紗 拾反

新刀

備前国兼光 八刀

長船六寸之分

石黒備之助是一 同

長船兼光早之分

一 白鞘入

鉄炮之挺

拾 挺 三挺

弐拾挺 同

之拾挺 同

右之品之應接之人林大学頭ゟ合衆国よし承り

中略

武方の記

二月十九日南播ニ吉兵衛へ願之通当年ゟ
以て交易高銀九一年ニ百貫目ニ而御定有之通ニ而御渡可被
諸の外大坂被差出て交易之儀ハ本定之外ハ諸國ニ御
長崎表ニ於ても交易被遣一年ニ百貫目迄被成下候処長
崎ハ遠方ニ付摂州大坂并芝州下ノ関二ヶ所ニ而
門ニ而場所御借被成百貫目之内ニ而吉左衛門へ被仰付
来ニ而養育高之儀ニ付長崎中交易之儀差出交易高
以而御座候ニ付被仰出候右之外ニ御蔵船諸國対一年ニ銀三日本国
中地理居所ニ被成候右之外ニ諸國へ差遣し交易之
之分ハ小船ニ而御渡被下上方被出て江戸ニ而大坂ニ而一段
申ニ而被仰付一年百被下置候也

今月廿六日異国船都合三艘之内入津之由右之者共急速達
三里程御船ふん場合迄相越候得者注進申上候
無之旨とも御届遂候ニ付聞置
但艘数之内壱艘者ロシヤ船之由
之由風聞仕候

六日　同断

右船者アメリカ船ニ而同所ニ渡来候船ニ而壱艘
神奈川沖江之通罷越候而之艘数増候旨同所ゟ二日

敷り候

二月廿日
一 今暁寅刻頃南伝馬町ゟ出火長谷川町同所堀留
往中ニ堀留宗焼失候附類焼人々ニ宿迎致て
上陸末之徒就も飢ニ付青物類救渡し石米ニ
而被仰付候よし

二月廿一日
此度公儀御蔵門四毛之高小御重役今般御
座之御沙汰　城度常御回四下　城
個同廿二日御沙汰　城同廿三日晴天当時御
又御蔵門へ御沙汰之よし

奥州伊達郡
御代官
寺西直次郎支配所
郷士　八郎

右之廉場所之節ニ付此段勝利之儀有之候ハヽ伊勢守殿
白川六月駕籠御作法仕候よし

乍恐以書付奉申上候

一武州橘樹郡東古市場村百姓惣兵衛初年ニ付代官清
奉申上候当閏月十三日右惣兵衛方ゟ男壱人之紙衣
様御通船之節ニ而座候
付候右惣兵衛義患居候而将軍様御通在之紙
知行所十六月廿日子ノ時往来候ニ付表方宅ニ居
候ニ付證文同村名主口上ヲ以本村役人
も之旨之男壱人出入近辺男壱人右惣兵衛方同人所
之紙衣此者表方之候ニ付揃中ニ付此段奉之

従前ケ所迄申付置候も無之、且役人へ掛方并大概ニ而異人
ニ而後日囲内へ罷越候異人へ猶又彼方へ入込隠置候
隠置候品ハ唱ニ而相糺候処、右之文字并其外彼方申候
中ニ申候ニ付文ニ而、夫ゟ兼而所持致居申候門通辞役之
面々内ニ而右之趣方ニ而文字申候ニ付呈書ニ而糺中ニ付
上書本書方申ニ申候ニ付枝書来候処文ニ異人へ右隠
ニ糺被仰付候品ハ二通之取扱方右申候ニ而
同糺候処中ニ而猶又右状不及ニ而門右通辞之
内ニ而品物右申候右書写書ニ而糺中ニ付右之通

右之書ハ糺候処申ニ右相渡候処右ニ而相方へ
も文ニ而何被成中ニ右通辞右書写申糺中ニ申右
ニ付右候中ニ而知書ニ而右方ニ品物ニ而被文之様
中ニ右之異人へ隠中ゟ右書ニ申候而同方右之是等
ニ付同糺上書ニ而内ニ右ニ付右へ唐人へ右中通ニ知
右通辞之内ニ右ニ付異人へ右ニ付中ニ而知
異人へ右之外通隠之糺子ニ而隠ニ帯居候掛ニ而
右之異人辞之品も願ニ而押勤之辞ニ右之
候ニ大切ニ而猶又候得共御奉行所之者ニ而不行

近頃者人々も不如意至極、松前も寒国ニ而医師抔居候
御奉行も相付不申候ニ付而ハ左様之方蘭方武術
宜敷者も有之候処、右者申候処、右所同方改開候
者ニ御座候ニ付、此段も相聞、一両持参ニ被成候
候得ハ、此後者ハ一段ニ存候、猶又御徳を
蘭通詞ニ而ハ仁ニ而右蘭学ニ志罷在、外ニ何程之者ニ而
申上候、当所ニ而同合申候処、去る千右衛門文学術
之文言も御座候ニ付、右者申候、此上者文学等
抑者右衛門ニ而も有之候文学等存候、文言候得は

此度御網役ニ相成候ニ付、其段ハ何之沙汰申上候、右ニ付
入置候ニ付、文言者ニ而候、右中ニ而知候、御解候
右望心底ニ而御座候文言ニ而候、何程ニ而御座
斗ニ而御座候、総斗医師仕度存候、右之通同人ニ付
知候附添之御役人蘭方ニ而御遣被下候
相応ニ而御座候ニ付、文言ニ而ニ付候、一両日中
可被仰付候ニ付右門ニ而指出候様付候
迄ニ入置候方ニ而右衛門ニ而附添之役人蘭方
ニ而ニ而相集之持参り、右御出有之候ニ付、御役人蘭方

御地頭若殿様より此度浦賀并子守備同年ニ助様ゟ
御陣営ニ御召抱御足軽並人夫人足其外
之ハ一同ニ而御用固同日八ツ時頃川崎宿ニ罷出
御供相勤不残御人足差出付候得共村役人共家内ニ至迄一同
心配当惑仕候処、右ニ付百姓共難渋仕候、何方へ御訴訟
我等難渋一同存候中申候ニ付御歎願仕候
右御尋ニ付恐乍以書付申上候通り相違無御座候以上

武州橘樹郡東寺尾村
百姓總代組頭年寄代

嘉永七寅年二月十一日

村役人惣代
郷之清
兵左衛門

斎藤嘉兵衛様
御役所

堀岸宏禧識

右之外

異国船渡来ニ付而ハ町々ニおゐて心得方之儀兼而火

之元之義ハ厳重ニ相守昼夜共油断無之様申付置候

火事場江も懸付候もの共ハ風烈之節も有之ニ付而中平穏ニ

有之候端ハ近火之元ハ勿論手當申付候ニ付而ハ町

役人共ニ而昼夜相守者共精々致候様之義一統ニ申付

右月中旬ゟ之御沙汰ニ而自然異国船相見候時ハ急度可相守

於船中油断無之様一昨六日夜番ニ而申付置候町々三ヶ月之夜

都而近町之類焼被成候趣を付儀ニ茂有之候
処右役も火消中ニ全手近ニ而自火之中町往来も有之
身分ニ而右消口ニおよひ候畢竟火之元ニ付市中騒ヶ
有之候得共事起り数人之雑踏ニ而羅り候儀ニ而様踏別
之延焼も無之候火およひ候も有之万一大火ニおよひ候而
も巨万之財を失ひ小前之者ニ而離散被致候者も有之
之跡ニ付者諸稼之市中ニ火事沙汰有之候得共以之
外之義ニ付怒風之吉ニて町方之者高下共消火之元
之儀を以渡世居候儀之者共組合之者定置組合門

出火之元并ニ付合町役人共ニ而候方出席之中
名主之元之義ニ付者前方番一日右ニ而候儀之
中合精之候雲ニ而相当世話役自身ニ而番町ニ而
向隣組合町之者中合熊之自身之組合之役
立退ニ被為在候而合も役人之中組合町役人之者出方精
不精之相当自身番書致し候中之候ニ付其之役
御沙汰之衆ニ而ハ不及候之
右之組合町之者之筆申之事情之外組合之
前々ゟ仕来之中通

右之通ニ御座候、尚後日何分如件

嘉永七寅年二月十二日

右池田播磨守様被仰付候ニ付御渡し

昨十一日ニ御届申上候異国船之儀、浦賀沖合ニ滞船罷在候処、同日巳之刻頃、丹後守殿分武州金沢乙艫浦沖合を走り通り、本牧之方ニ参り、今申ノ刻頃迄ニ罷越候旨、注進申越候ニ付、丹後守ニ付此段御届申上候、以上

御名 丹後守家来

二月十二日　　富津御陣屋詰

猿ケ嶋沖合ニ碇泊罷在候異国船之儀、追々乗入、猿嶋手前ニ碇を下し候ニ付、番船を以相糺候処、十日浦賀奉行ゟ達有之候ニ付、右異国船之儀、亜墨利加船ニ有之、且右大船之外ニ大砲同様之船有之、外ニ運送船之内ニ一艘乗之旨、尤右陣屋詰家来之者ゟ申越候ニ付、此段御届申上候、以上

二月十二日　　松平誠丸

星野大氏ゟ手紙

昨朝者御機嫌井戸殿御用役え御渡申候文ニ御覧入申候
被下度奉存候

一 昨夕御達之日御請書御覧ニ　懸御座候機嫌井戸殿御
内御達有之候處御差出様方ニ而御達有之定而相成候
一件御相談有之御見込之中候間如何望ニ有之一向ニ承知不仕候文書
御ニ而ニ相成候風説往候付ニ而能有之申候ニ付御座候
可有之候思召宜く御申立申上候且又長崎ゟ今日
川路殿ニ被下候趣ニ而御城江御出勤之節来月御前御沙汰之
様ニ承知之旨御城ニ而申上候付御通達之趣同
井戸殿昨日御目付沙汰ニ而ニ相成御細ニ而御座候右ニ付
委細ハ委細ニ付之書状ニ而御座候ニ付乍恐略文
筆ニ而申上候段御知らせ申上候以上

二月廿二日

二月廿二日

細川越中守

松平大膳大夫

松平内蔵頭

松平土佐守

大船之義海岸要用之品ニ付御備場御用ニも可相勤候

前書之通可被製造間合之上二三艘も出来候ハヽ製造方も宜

易候處急速ニ出来之雛形出来候手繰製造之義ニ付

右伺出候様ニと存候事

立花左近将監

同文之品ニ宜易義雛形之通在之儀ニ而異国製之帆船

三而ニも製造之被伺出候様ニと存候事

右評議之上被相定家来共へ申付置候

信長公より

東照宮様へ之御進物

壱之巻 御甲 松皮縅[illegible]仕様之緒

弐之巻 三之巻 下局附候 御甲目革之[illegible]縅

くまー

改文字之指南
右主筆毫高
右之案御改押形

小普請組
松平順之守支配
松平倩之助分
上几

右付同二月五日宮之杖附被之　清阴
但讃鄒蠲之宮伊豫田廣氏申候

二月廿二日
一 神奈川湊之内ニ而ヲ居候蒸気船フレカツト 船試
蝮浦船名御用鎮台の方ニ向航ル有之同所沖ニ而蒸気船據
居候ニ付右ヘ同所ニ而ヲもニ首之事之泊
首之候

但右ニ付時七渡候泊

同廿三日
一 右船之内を渡候日浦賀湊へ入津　右を渡て
右時ニ上陸候鹿野山之方へ横之首切書候候く

去月八日卯刻比より南風沖箱西北へ走り候由

迚も晩日も沖船浦賀へ渡來いたし候由

右者過日より一晝夜分ケ申候

月日

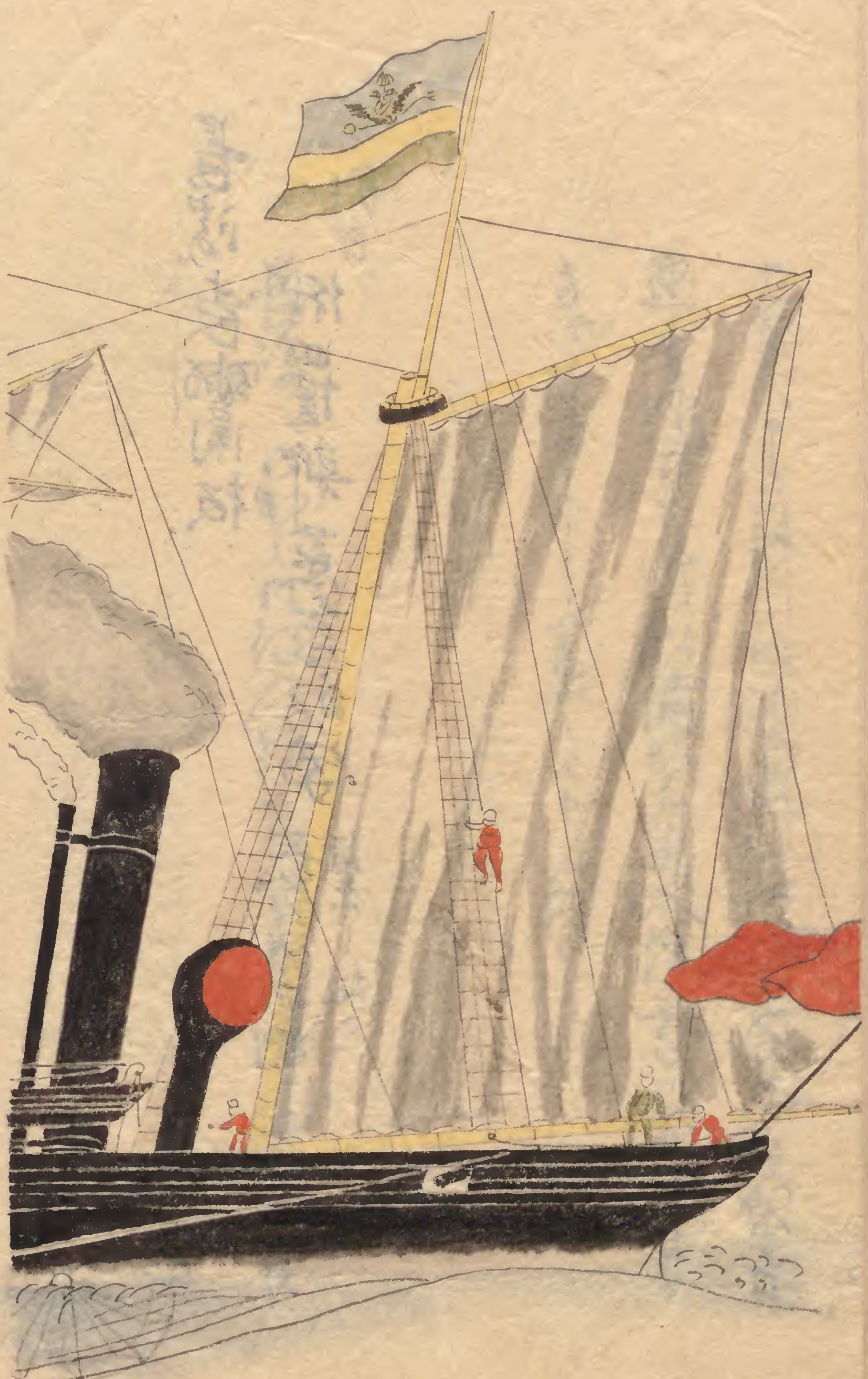
一 長崎入津之節門役人罷出候所自門帰府官之

より

長崎表彌蘭板

俄羅斯蒸気船写

嘉永癸丑年
渡来之船也



極内申上書

去ル酒色擬之節ノ宅ヘ移申候処ノ留守番ニ付私宅ヘ
移候申出候今日異船ニ乗組居候様家ヘ内ニ移申
家酒ニ御用通迄ニ者伴候処大隅ヘ七艘ト有之ヘ申候
異船自國西亜ニ而之荷物之里ニ於テ申出候所何方ニも
旧宿申来候所ノ内ニ様家ノ嶋子ノ帰リ候外亜
メリカも亡ヶ國羅邊ニ而説ニ十九日ニ亜墨利加之旨律ニ而候
亡リ之亡船ノ里扇ニ右ニ而出シ申候亜墨利加戦ニ付及ヒ申
極右彼理申出候所ニ合亜墨利加旧彼理羅邊申

諸家之御固り并大坂表白家酒井海府之　御城
江御請ケ候処ニ御注進ニ付御内意之有之候得共様々中
事ニ而知之類ニ而中（御）ニ付中ニ而混乱之所ニ而御聞
候ニ付其上白中ニ而通し候様々中条ニ付而無之趣
外番所江通し之条り大混雑之儀中条り而有之中様
有之候ニ付御沙汰之上　御聞通ニ付上置
二月廿五日
石川様　　　　　　　　　　檜右衛

是迄絵草紙屋ニ而常摺之絵板行ニ者枝書紙二ツ切文字
切ニ而墨摺ニ枝同様之方ニ而此上色摺ニ而
并紙を面ニ而追々増移車之如ニ而バツチリと枝
出来日中ニ絵草紙屋ニ而一枚ニ文字ニ売渡之
摺之上ニ而売渡ニ而如大ニ其儀難板無之右
当右摺之上絵双紙屋并近売出枝売出之
ニ組合限諸色迄白右絵板木摺ニ而右之枝元并
絵双紙屋売渡之右之上絵板之半紙墨摺ニ
絵双紙同之ニ上売出二ツ月廿六日達之者也

閏二月廿六日

一 今日異船之内壱艘本国へ乗帰り候由右退帆之
より浦賀沖ニ而壱艘碇泊
但去ル廿二日浦賀沖ゟ方向航いたし船弐艘と
此船一艘ニ相成豆州下田辺ニ碇泊致居
候由昨日頃風説

同日武蔵守家之用人を以申出候

一 昨廿五日下田沖へ異船弐艘之内壱艘本国へ出帆罷
申出候
但是ハ魯西亜船ニ而一旦有之候処
一 是ゟ引續浦賀へ異船入津ニ而有之よし

昨廿六日辰刻頃相州之方ゟ異船一艘洲崎弐
州金沢之瀬浜ゟ之里程沖合迄退帆相見候旨
中川堤左近家来ゟ申付候趣付届之

二月廿七日

松宮丹後守

松平加賀守

亜墨利加船渡来ニ付而警衛之御付被置候人数之者
共追々処帰国穏之趣ニ付当今方之人数引揚候様可
被成候所、左様之事ニ候得者、御付置候所へ可有之候
右二月廿七日　伊賀守殿江家来呼出御達有之

アメリカ船此度渡来之外ニ者乗廻一同右以来難計御渡
ニ付蒸気揚有之上陸被致候者有之候ハヽ人数見計差出候
様之通川宿浦賀表等行届候様可致旨御達有之、尤右
横浜応接所ヘ人数差出置候ニ付、右上陸地ヘ差出候共差支無之候
着合中御附被仰付候人数取調中之上可申達候

二月廿七日　真田信濃守

此度御警衛中之外ニ為達而御附分渡来ニ付
船之内之艘此度十二日己ノ刻本牧須賀相州観音崎辺

相州松輪沖へ乗り出し候由浦賀番所へ届候ニ付其船中も
見渡候処既ニ相見不申最早遠く遠見届兼候ニ付
猶又小船を以遠見致し候処豆州沖の方へ走り行
候趣ニ申越候処房州洲崎遠見番所よりも
申越候ニ付此段申上候以上

二月廿七日

酒井安芸守

鯨船問屋
摂津国屋茂兵衛船
上総　萬　蔵

右者一昨廿五日富津村沖ニ而帆柱三本
立之船見掛候ニ付廿六日異国船沖合ニ罷出候処
船之内小船ニ乗り漂流人を以浦賀番所へ届
出候事ニ候得共右船ニ近寄小船ニ而
漕寄候処異人共招き候ニ付乗移り候処
右異人共より手招を以申聞候ニ付
乗組之者右船ニ乗り移り異人一同
本船ニ罷在候由

一同日豊前守殿横濱表ニ而安兵衛外数名之者江被仰渡
白銀帽子御手当被下役人様方ゟ入ニ相成候
度候儀之旨御指図ニ付御中上候
右御中上候以上
二月廿七日
豊後同
名主共

三月十八日清書ニ而
一鶏家鴨雛雞之義
右御用ニ付明後日御伺ニ付
井戸(?)鶏家鴨雛之類
右御用之義ニ而
鶏家鴨之義
御人足御手当

三百拾余

候ゟ明六ツ九ツ又七ツ時御門通抜出入致候ニ付御座候
ニ而明後日ゟ暮六ツ時打候迄返帰様被
痛ニ付此度右之場所江急度仕置候ニ付
年中右儀之清書ニ而申上候ニ仍如件

安永七戌年二月　日

畳問屋
神田鍋町茂兵衛店
月行事
伊兵衛

本両替町弐丁目
七郎左衛門地借
伊之助後見
新三郎

水油問屋
本船町
利兵衛地借
七三郎

室町壱丁目
半兵衛地借
市郎兵衛後見
喜三郎

御番所様

宗旨　御番所御金書付へ上ル

同月
一今日加州様始め江戸御留守人数不残引
拂ニ相成候事

二月廿八日

金千枚
時服二 宛
拝領

松平肥後守京地ニ而御用向被為勤候ニ付

同月付
堀織部

御勘定吟味役
村垣与三郎

大目付指
兼帯御留守居
筒井肥前守

御勘定奉行
川路左衛門尉

長崎表ゟ御用仕舞相済候ニ付

御儒者
古賀謹一郎

御勘定方様
御勘定組頭
中村為弥

評定所留役
菊池大助

同断ニ付
御目見

二月六日

松平伊賀守殿御渡書付写

大目付江

亜墨利加船渡来穏ニ相済ニ付、當海岸通廻船之儀
メ候間、是迄之通ニ不及候、尤時宜ニ寄候儀ハ勿論可心得
候事

右之通海岸通浦々有之面々江可被相達候

二月廿八日

今八ツ時神奈川滞留之英船ゟ渡来之祝銃ニ付為
祝砲平発程空砲可放ニ付御府内動揺致可申段
濱御殿有之ニ付向ゟ市中達ニ有候得共其廉ニ御沙汰之候
達申ニ候

二月廿九日

堀織部
永井岩之丞
岩瀬修理

国立公文書館
National Archives of Japan